

プレス空知3月 深井尚子

3月は、旅立ちの季節、また、春に向かって心がうきうきする時期ですね。

しかし、考えてみますとクラシック音楽の中で、旅立ちをテーマにした曲は、それほど多くはありません。その中から、今月は2つの曲を紹介したいと思います。一曲目は、音楽の父と言われるヨハン・セバスティアン・バッハが作曲した、「最愛の兄の旅立ちに寄せて」と題されたチェンバロ、または、ピアノで演奏されるカプリッチオです。以前に、フランツ・リストが標題音楽を創作したとお話したことがあります。実は、17世紀バロック時代にも、バッハは、最愛の兄のために表題をつけた作品を残しています。この曲は、まだ、19歳の若きバッハが、オーボエ奏者の兄が、スウェーデン王の音楽隊に赴任するための旅立ちに捧げたものです。全6曲から構成されており、すべての曲に題名がつけられています。その中の3曲目までが、遠くに行ってしまう最愛の兄を思いとどまらせ、ずっと一緒に居たい気持ちを表現しています。しかし、兄の思いは強く、旅立ちが決定的になり、郵便馬車の高らかなファンファーレで送るという物語になった曲です。このバッハのカプリッチオは、ほとんど演奏会の場で取り上げられることはなく、一般的には知られていませんが、音楽の父といわれ、すべての作曲家たちに絶大な影響を与えた偉大なバッハの若き日の純粋で直接的な表現が魅力的です。バッハの作品は、対位法の難解な音楽と見られがちですが、実は、とても自由な作曲法と豊富なイマジネーションで、私たちの心に深く届く素敵な曲をたくさん書いています。

さて、もう一曲の旅立ちを題材にした曲は、ベートーヴェンのピアノソナタ作品81a「告別」です。ベートーヴェンは、標題音楽をほとんど書きませんでしたし、その対極である絶対音楽の作曲家と言われていています。しかし、32曲のピアノソナタの中で、2曲だけ、ベートーヴェン自身が題名をつけた曲があります。その一つがこの「告別」です。この曲の冒頭に、ドイツ語で、**Lebe Wohl**（さようなら）と書いています。特にこのドイツ語は、再会を意味する、**Auf Wiedersehen**とは異なり、もう会えないかもしれない別れのときに使う言葉です。この曲は、1809年から1810年に、オーストリアのルドルフ大公が、チェコに疎開するときの別れの際に書かれた曲です。フランス革命の共和制の思想は、じわじわとパリから遠いウィーンにも押し寄せてきていました。そのため、この時期は、ハプスブルク帝国もその危機感から王族、貴族がチェコに一時身を寄せていたのです。ルドルフ大公は、ベートーヴェンの唯一の作曲の弟子で、生涯、ベートーヴェンを支援した人です。高い身分にありながらベートーヴェンとは、友人のような親しい関係にありました。「告別」は、そのルドルフ大公が、ウィーンを離れる時のベートーヴェンの悲しみを言葉でも表した、珍しい曲と言えるでしょう。3つの楽章から構成されていて、第1楽章には、さようなら、第2楽章には、不在、そして、第3楽章には、再会とすべて文字で書かれています。ベートーヴェンにとって大事な人が遠くへ行ってしまふ淋しさがダイレクトに伝わる曲になっています。ヨーロッパでも、大事な人を送る気持ちは同じであることがわかりますね。